



## 「笹川杯作文コンクール2011」～中国語で応募～ 第5回優秀賞作品

### 「福島の花」

四川省 周夢娜

1844年、福島の地に一人の偉大な女性が誕生した。彼女は、“幕末のジャンヌ・ダルク”や“日本のナイチンゲール”と称えられる、同志社大学の母、新島八重である。

八重は、会津藩の砲術師範、山本権八の娘で、幼少から女性の手仕事より銃器に興味を持っていた。戊辰戦争では、スペンサー銃を携え、500人の女子と共に会津若松城の防衛戦に参加し、そのため、“幕末のジャンヌ・ダルク”と称されている。明治の中頃には、彼女は“日本初の看護師”という身分で従軍し、“日本のナイチンゲール”と呼ばれた。戦後、八重ら女性看護師16名は、皇族以外の女性として初めて褒賞を受賞したが、女性の能力がおしなべて低いと見られていた時代にあつては、こうしたことは画期的なことであり、女性が社会に踏み出す第一歩となった。

八重は勇敢で強い女性であったが、より感銘を受けるのは、世俗に揺らぐことのない堅固な心を持っていたことである。戊辰戦争の前に八重は但馬出石藩校教授の川崎尚之助と結婚していたが、若松城の防衛戦が始まる前、人妻である八重は封建社会の男女の秩序に公然と挑み、自ら夫に離婚を切り出したのである。1876年、彼女は“明治時代の六大教育家”の一人、同志社英学校の創始者である新島襄に嫁いだ。封建文化に囲まれた生活環境も彼女の男女平等の願いを打ち消すことはなく、彼女は敬語を使わなかったばかりか、夫を“ジョウ”と呼び、“奇妙な関係”という周囲から夫妻に向けられた批判の目も気に留めることはなかった。彼女は、世間の人々に“日本初の悪妻”とさえ呼ばれた。それでも彼女は毅然とした態度で、自分の生きる道をしっかり歩み続けていくことに執着し、ついには優秀な教育家、西洋学者、茶道家との名声を残したのである。

女傑、新島八重は、福島の地に咲いた奇跡の花である。一世紀以上が過ぎたが、今の日本においても、彼女の勇敢さ、強さ、世俗に揺らぐことのない堅固な心は重要なものである。“3.11”大地震と原子力事故を経験した福島の被災者にとって、身内を失った痛みは時間が癒してくれても、新しい郷土は自分の両手をまめに使って再建できても、様々な俗世間からの目は自分の努力では変えることができない。

深刻な被災地である宮城県、岩手県と比べても、福島県は、地震と津波による生命や財産の損失を克服しなければならないだけでなく、原子力発電所の事故による巨大な傷をも負っているのである。福島の被災者は多いが、その大多数は原子力発電所周辺の住民で、“放射能難民”のレッテルのために、彼らの避難生活は他の人々より多くの辛酸と無力感に見舞われているのだ。日本列島全域で、多くの国民が“放射能と聞くと、顔色を変え”、福島の被災者は心ない言動の直接の被害者にもなってしまうのである。報道によると、3月中旬、福島県南相馬市から船橋市に避難していた小学生の兄弟二人が、公園で遊んでいた時、現地の子供が“地方の訛り”を耳にして、出身地はどこだと聞きに集まってきたという。兄弟が“福島”と答えたのを聞くと、その子供達は声を上げて逃げ出した。そして、逃げながら“放射能注意”と口にしていたという。兄弟は泣きじゃくりながら、一家が身を寄せる親戚の家に帰ったのである。両親はその理由を聞いて大変心を痛め、福島市での避難生活に戻ると決めたのだ。

厚生労働省が報道機関へ提供した情報によると、他県の旅館が放射性物質検査安全証明書を提示できない福島県人の宿泊を拒否したり、タクシーが福島県人の乗車拒否をしたり、葬儀会社が福島県の地震や津波の犠牲者の遺体を受け付けないというケースまであったという。西日本にある岡山県では、賃料の安い住宅に入居申請した福島県人が様々な口実で

拒否されたのである。”放射能難民”をもっと傷つけたことは、福島県内の一部の地域でも差別を受けたことである。現地の新聞によると、福島市に避難している南相馬市の女子児童が、福島市の病院で皮膚病の診察を受けようとしたところ、”安全証明書”がないことを理由に拒否されたという。ニュースでは、医療関係者は常人よりも理知的に放射能問題を扱うべきであると続いていた。人だけでなく、農産物、水産物、福島県のごみまでが“差別”を受けているのである。神奈川県川崎市の市長が福島県を訪問した際、地震と津波による廃墟のごみ処理を手伝おうと好意で提案した。しかし、僅か数日間で、川崎市役所のごみ処理計画課は2000本以上の反対電話を受けたという。

こうした差別や流言飛語と向き合うには、政府が最前に立って人心をなだめ、核問題の専門家と医学専門家が関連知識の普及に努める必要があるし、福島の被災者については、自分自身の心の強さがより重要なのである。福島の女傑、新島八重が身をもって示した勇敢さ、強さ、世俗に揺らぐことのない堅固な心こそ、まさに今の福島県人が必要とするものなのである。一たとえ外界からあれこれ誤解されても、人々が生活する勇気を失うことなどあり得ない。時が流れて正しい科学知識が広まるにつれ、こうした偏見を抱く人達も、次第に口を噤んでくるだろう。それまでの間、まずは強く生きて欲しいのだ。たとえ他人の考え方を変えられないとしても、自らの生活態度と世界の見方は変えることができる。一時的には冷たい眼差しも、災害への恐怖と無知から来るものなのであり、全ては素晴らしい生活が到来するまでの試練と見なすことができる。

心の強さとは、まさに全ての事物を包容して征服できる偉大な力なのである。八重は、あの時代、男尊女卑の巨大な圧力のもと、動じることなく堂々と、勇敢にしっかりと自らの生きる道を歩み続けたのだ。彼女は一介の女性でありながら、自らの力だけで、強大な現実と頑強に立ち向かい、そして最終的には社会からの承認を獲得したのである。100年以上も経った今、再び福島県人はよく似た困難に直面している。しかし、今の彼らは独立独行で戦っているわけではない。結局のところ、人類の善良な本性から来る温もりと支えがまだ主流なのである。だからなお更、福島県人が勇気を失う理由はなく、八重が成し遂げられたことは、彼らも同じように成し遂げられるのである。

誰よりも早く帽子を被り、革靴を履いて、ゆったりと優雅に街頭を散歩していた八重、その常に旧習と相容れない姿は梅の花に喩えられ、俳句にも詠まれた。「世の中の 春に先立つ 梅の初花」八重の強靱さと粘り強さに根源を持つ、きらきらと美しい福島の花が、再びこの地上で満開になることを願っている。